

〈解答例＝内倉〉

写真撮影の構図法でいうところの三分割構図に即して言えば、この写真は上三分の一と下三分の二に分断されている。上方は奥行きを感じさせる明るい遠景、下方は濃淡をもつ陰影としての近景である。上方隅の僅かなスペースに収められているのは、水辺に放牧された十数頭の牛であり、鮮やかな緑の中で小さな群れをなしている。牧草地に接する湖には、水際を縁取るように、白い雲と雲間から覗く青い空が映っている。下方は湖の中心に向けて空を反射しない陰が全体を覆い、その暗部にあって太陽だけが朧な輪郭を漂わせている。

たとえば、水面に映る太陽に注意を向けると、広大な空が下、本来は太陽を見上げるものが位置するはずの大地が上という非日常的な位置関係に違和感を覚えることになる。試みに上下逆にして眺めると、そちらのほうがいくらか現実的だ。なるほど、古来より慣用されてきた「水月」や「逆さ富士」であれば、シンメトリーな位置関係によって、私たちはそれをそれとしてはっきり意識できる。しかし、この水面の太陽は、明るい空間を下方で支える大きな暗部の中にあって、言うなれば、青空の下の闇、闇の中の太陽という、重層的でアンバランスな光景を象徴的に作りだしている。

アンバランスな光景は、自然の秩序が崩れたことを意味しない。写真家の趣向で切り取られた自然が、私たちの感覚秩序を刺激し、違和としての光景を現出させるのである。考えてみると、この違和感こそが写真家の言う「心の秘境」ということではなかったか。まだ人が足を踏み入れていない未踏の地さながら、私たちが心のどこかに持っている今まで喚起することがなかった感懐、それが「心の秘境」の謂ではないか。また、「心の秘境」はそれが「心」に関わる以上、極めて個性的なものである。したがって、「自分の物語」は各々が自分を語る「心の秘境」の章を持つことになる。